

< 晩秋のウスタビガ >

桑原紀子

雑木林が紅葉する頃、年一回姿を現す蛾がいます。ウスタビガです。

晩秋や初冬の林の中で、ひととき目立つ鮮やかな緑色の繭を目にされた方もいらっしゃるでしょう。

緑色の長い柄でしっかり枝に固定されているカマス型の繭は、落葉した木々の枝先で、キラリと光る宝石のようです。



コナラやクヌギの紅葉に合わせる様に羽化するウスタビガは中型の大きさで、雌の羽は黄色、雄は赤茶色で木々の紅葉に溶け込みます。4枚の羽の中央にはそれぞれ小さな丸い窓があり、すりガラスのような不透明の膜になっています。鳥の目をくらすためなのか、複雑で不思議な装いです。

数年前の11月半ば、その日の朝羽化したウスタビガの雌を野外に放そうと、私は多摩丘陵の雑木林に出掛けました。秋、林で見つけた繭から羽化したのです。雌は飛ぶ事を忘れたかのように、ぼってりしたお腹で、抜け殻になった繭にしがみついたままです。私は繭のついた枝ごと持って、ぶらぶら林の中に入って行きました。晩秋の林はしんとしています。突然赤っぽいものが私の傍に飛んできました。

周りをぐるぐる回るとすぐどこかに飛び去りました。しばらく行くと又もうひとつ。こうして次々にまとわりつくようにやって来ます。その時には、私にもそれがウスタビガの雄だと分かりました。自分がウスタビガの雌に変身したかのようにドキドキです。

静まった林のどこに、こんなに沢山の雄が隠れていたのでしょうか。そしてどうして雌の居場所がわかるのでしょうか。手に提げた雌をよく見ると、繭につかまった雌のお尻から淡い緑色の小さな突起が出ています。羽化した時には出てなかったのに。鼻を近づけても何も匂いませんが、きっとウスタビガの雄にだけ分かるフェロモンを出しているのだと思いました。このフェロモンが風に乗って届き、隠れている雄たちを引き寄せているのです。枝をコナラの木に結びました。間もなく雄がぶつかるように飛んできて、2頭は向かい合わせになって交尾しました。黄色と赤茶の羽が合わさり、風が吹くとワルツを踊っているようにクルクル回ります。コナラの紅葉のなかで、ウスタビガは長い間交尾を続け、離れると、雌はすぐ自分の抜け殻の上に卵を産み始めたのでした。